

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04160

研究課題名（和文）精神障害者対象の介護職員養成プログラムのエンパワメント視点に基づく多角的評価研究

研究課題名（英文）Research on evaluation by multiple approaches based on the empowerment perspective of care staff training program for people with mental disabilities

研究代表者

清水 由香（丸山由香）（SHIMIZU, Yuka）

大阪市立大学・大学院生活科学研究科・助教

研究者番号：90336793

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、精神障害者対象のホームヘルパー等養成講習プログラムがもたらした影響を、講座からの学び、就労や生活面から検討した。質問紙調査は113名、また面接調査は24名を対象に分析を行った。精神障害の経験を経た自己成長を目指し、「自分を変える・挑戦の試金石」という受講動機をもち、受講により自信・意欲・希望、仲間・相談者を獲得し、学びの充実感を示した。資格取得後に就労経験の有る人は75%だった。就労継続期間と生活自己管理の実践の割合が関連し、介護・福祉現場の就労が継続されにくい課題が示唆された。また学びの意義を見出し、ピア・ヘルパーの経験のある人でリカバリーの程度が高いという関連を認めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

精神障害者を対象にホームヘルパー資格取得者を360名以上輩出してきた講座をフィールドとしている。その調査協力者のうち介護職員や訪問介護員等の資格取得後10年以上経過している分析対象者が50人以上を含む集団の心理社会的状況を分析し、長期的な効果の影響を提示した点に学術的な意義がある。資格取得後の就労という成果のみならず、学びはエンパワメントプロセスの要素として重要であり、「学び」の環境づくりが今後の社会に求められることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study examined the effects of training programs for home helpers such as those for mentally handicapped persons from the viewpoints of learning, working and social living. The questionnaire survey was conducted for 113 persons, and the interview survey was conducted for 24 persons. Aiming for self-development through experience of mental disorders, he had the motivation to change himself/self a challenge touchstone, and gained confidence, motivation/hope, peers/consultants, and showed a sense of fulfillment in learning. There were 75% of people who had working experience after obtaining the qualification. A positive relationship was found between the length of working duration and the practice of self-management of living. It has become clear that it is difficult to continue working in nursing and welfare workplaces. It was also found that those who have much significance of learning and who have experience as peer helpers have a high degree of recovery.

研究分野：精神保健福祉

キーワード：精神障害者 リカバリー エンパワメント ピア・ヘルパー 就労支援 訪問介護従事者養成

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、精神障害者対象の就労準備教育・訓練として行われた介護職員養成講座(ホームヘルパー2級、ガイドヘルパー、平成25年~介護職員初任者研修課程;以下、本プログラム)の意義や効果を検証する。平成13年度の本プログラム修了者は、全員が資格取得し、約8割が就労を達成した(殿村壽敏ら2003)。本プログラムは多面的な生活の変化をもたらすことがうかがえ(石神文子ら2009)、「学び」を介してエンパワメント向上に寄与するものと考えられる。

同様のプログラムに関する先行研究で山口弘幸(2006)は、講座プロセスの意義および雇用の場の確保や創出、およびピア・ヘルパーや業務の研修機会の創出などの課題を指摘する。鄭敏基(2011)はプログラムの満足度が高いことを示している。これらの先行研究は、プログラム修了直後の評価にとどまり、長期的なライフコースの視点からの評価はされていない。

(2) 本プログラム開発の背景の一つに、ピア・サポートの効用への期待がある。精神障害のあるホームヘルプサービス利用者が、サービスを受け入れやすいように、共感性のある同じ障害を経験した当事者ホームヘルパーによる訪問が期待された。行實志都子(2006)は精神障害のある利用者宅に、提供者として実践する人、そしてその利用者とペア形式で満足度、ピア・ヘルパーとしての意義について各々評価を行った。これまで、ピア・サポート提供者のリカバリーの促進に関する研究は、Mowbray, C.T.ら(1996)により示唆されている。日本のピア・サポートの特性や有効性に関する研究はすでにあり(坂本智代恵2008、相川章子2011、2012)また、Gerry, M.ら(2011)は、ピア・スペシャリストを対象にした調査から、トレーニング機会を得てエンパワーされると指摘する。リカバリーとは、精神障害を持つ人がたとえ症状や障害があったとしても人生の新しい意味や目的を見出し、充実した人生を生きていくプロセスを意味する(Anthony, W., A., 1993)。以上をふまえ、ピア・サポートという相互支援の機能と、多義的な「学び」がエンパワメント強化に働き、リカバリーの促進に寄与することが考えられる。

2. 研究の目的

(1) 本研究は本プログラムが修了者の生活・人生に与えた影響を、受講に対する主観的評価、アウトカムとしての就労状況、および心理社会的なりカバリーの状況から検討する。

(2) プログラムの効果としての就労と、その就労をめぐる課題や就労による主観的な生活変化から就労支援に必要な支援策への示唆を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) プログラム修了者を対象に、本プログラムに対する回顧的評価および、これまでの就労に関する状況や意向、資格取得後の就労による肯定的な生活変化に関する認識、心理社会的なりカバリーの状況を把握関する質問紙調査を行う。この調査から、就労支援にかかわる要因、リカバリーに関連する要因を分析する。

対象と方法：A法人(平成13年度)およびB法人(平成16~24年度)による本プログラム修了者360名のうち、連絡先不明等を除く284名に無記名自記式質問紙を郵送。113通(回収率39.7%)回収。質問紙の発送、回収は平成28年10月~平成29年4月である。分析対象者の特性は、男性が58.8%、年齢の平均±SDが46.0±9.3歳、現在給与収入有りが60.0%、ピア・サポート等の経験有りが54.1%、資格取得後の最長就労期間の平均±SDが55.0±50.2ヶ月、介護福祉職が76.5%であった。

分析方法：-1 「本プログラムからの学びや意味づけ」(『受講の学び・意味づけ』)について。講座受講からの学び、資格取得による意欲や自信などの心理面、社会関係の獲得など、筆者らが作成した受講の意味に関する20項目(5件法：「まったくそう思わない」1点から「どちらともいえない」3点、「とてもそう思う」5点を付与)の因子分析、およびその各因子で構成される項目群を従属変数として、性別、年代、学歴、資格取得後の就労経験の有無との関連を分析(t検定、一元配置分散分析)した。

-2 本プログラム修了者の資格取得後の就労経験による肯定的な生活変化の自己評価(以下、『生活変化』)とその関連要因の分析。『生活変化』に用いた変数は；「体調面が安定するようになった」「自分に自信がついてきた」など独自に20項目を設定した。「まったくそう思わない(1点)」~「どちらともいえない(3点)」~「とてもそう思う(5点)」の5件法で得点付与し、因子分析により各因子項目の素得点合計を変数とした。独立変数には性別、年齢、ピア・サポート等の経験の有無、給与収入の有無、資格取得後の最長の就労月数とその職種、そして「ヘルパー養成講座受講からの学びや意味づけ『受講の学び・意味づけ』」である。

-3 精神障害者対象のリカバリーを評価する日本語版24項目版 Recovery Assessment Scale(RAS)(Chiba et.al 2010)の尺度を用いた。本尺度項目は、ChibaらがCorrigan, P.W(2004)の尺度を翻訳し、信頼性、妥当性の検証を行っている。「目標/成功志向・希望」「他者への信頼」「自信をもつこと」「症状に支配されないこと」「手助けを求めるのをいとわれないこと」の5つの構成要素より成っている。合計得点は24~120点で高得点ほどリカバリーの状態が高いことを示す。RASのスコアとの関連要因として、年齢、性別、調査時点での就労(職種問わず非常勤含む)、『受講の学び・意味づけ』、ピア・サポート活動の有無(精神障害者対象のホームヘルパーやガイドヘルパーのサービス提供の経験)を検討することとした。

-4 就労経験者を対象に就労や求職活動の状況、および就労継続期間との関連要因、また、「就労の困難感」との関連要因を検討した。なお、就労の困難感に関する14項目(5件法：「ま

まったくそう思わない」1点から「どちらともいえない」3点、「とてもそう思う」5点を付与し、そして、就労継続のための工夫として「睡眠、休養をとる」など9項目の該当項目数を「工夫実践スコア」として設定した。いずれも先行研究（石神 2009）を参考に作成した。「就労の困難感」の項目は因子分析を行い、各因子で構成される項目群の合成変数を作成した。以上の統計分析は、分析は IBM.SPSS Ver.24 を用いた。

（2）プログラム修了者を対象にしたインタビュー調査。

本調査の対象は、平成16年度～平成24年度の本プログラム修了者に、質問紙調査郵送時に面接調査への協力依頼状を同封した。同意の得られた24名に平成29年1月19日～4月24日に面接実施した。半構造化面接を、個別に面接者1～3名で実施した。面接時間は各1回、50分～209分（平均90.2分）。発病した前後の生活の様子から、受講動機や経緯、受講中の印象、学んだこと、資格取得についての思い、就職活動とこれまでの就労への思いなどを質問した。録音はICレコーダーで行った。

面接データの分析については、インタビューを書き起こした。研究課題に沿って関連するインタビューデータを抽出し、ラベルを付与し、そのラベルをカテゴリーができるようなまとまりを作成し、研究課題ごとにどのような内容が解釈されるのか、整理した。

（3）倫理的配慮について：質問紙調査＜上記（1）＞については、A法人修了者の一部が登録する連絡会の名簿とB法人が各種情報提供等を目的に管理する名簿から連絡会代表者とB法人理事長の許可を得て対象者を抽出した。調査目的、個人情報保護や結果の公表方法などを説明した文書を質問紙に同封した。質問紙の回答をもって、調査への同意とみなした。なお、実施計画は研究代表者所属の大阪市立大学大学院生活科学研究科研究倫理委員会の承認を得た（平成28年10月12日付 承認番号16-28）。

上記（2）については、インタビュー調査の趣旨、方法、録音、個人情報の保護とデータ保管の方法など倫理的配慮について文書を用いて協力依頼を行い、改めて面接時に再度書面を用いて説明を行い、調査協力に同意が得られた場合に書面に署名捺印を求めて調査同意書を取り交わした研究代表者所属の大阪市立大学大学院生活科学研究科研究倫理委員会の承認を得た（平成28年12月14日付 承認番号16-37）。

4. 研究成果

（1）質問紙調査の結果、研究の方法 の成果を中心に以下、説明する。受講の動機は「就職に役立つ」「ヘルパーの仕事をやってみたい」「資格取得に魅力」と就労意欲に関するものが多かった。また、特徴として、専門職に勤められて受講した人が多かった。受講後も就労や生活面を相談する資源としてその専門職を活用できる点が重要と考えられた。

『受講の学び・意味づけ』20項目の因子分析の結果、第1因子「資格取得による自信・意欲・希望の獲得」＜項目数：5＞、第2因子「自己理解と社会に関する学び」＜4＞、第3因子「学びがもたらす生活充実感」＜4＞、第4因子「仲間・相談者の獲得」＜2＞であった。因子項目の素得点合計を変数とした。「素得点平均値/1項目」が最も高かった因子は「学びがもたらす生活充実感」の4.11点で、低得点は、「仲間・相談者の獲得」で3.45点だった。「学びがもたらす生活充実感」とは、「学ぶこと」への充実感、「生活のはりあいになった」などの項目で構成されている。学びが生活の意欲や生活の変化を促すものになりうるということが示唆された。なお、個人特性や就労経験との関連性は、統計的な有意差を認めなかった。

資格取得後の就労による『生活変化』の因子分析の結果、15項目で第1因子「社会性の向上と拡大」＜5＞第2因子「社会生活を通じた日常生活の安定」＜4＞、第3因子「生きがい・目標」＜3＞、第4因子「自己存在の肯定と自信」＜3＞にまとまった。15項目全体の一次元性を確認し「肯定的な生活変化」とした。因子項目の素得点合計を変数とし、1項目あたりの平均素得点が高かったのは、「生きがい・目標」3.80点で、次いで「自己存在の肯定と自信」、「社会生活を通じた日常生活の安定」、そして「社会性の向上と拡大」3.55点だった。『生活変化』と有意な関連を示したのは、『受講の学び・意味づけ』の「学びがもたらす生活充実感」がすべての従属変数に、「仲間・相談者の獲得」が「生きがい・目標」のみ、給与収入有りの人と「自己存在の肯定と自信」、「社会生活を通じた日常生活の安定」、「肯定的な生活変化」であった。これらの結果から、就労は生活変化と関連し、つまりエンパワメントの促進にかかわると考えられる。また、資格取得やその講座の学びに肯定的な意味づけをしている人で、現在の生活変化の主観的評価が高いことから、資格取得や学びの過程がその後の生活のポジティブな転換点になったと推測される。

RASについて、探索的因子分析を行い因子の構成を確認した。Chibaら（2010）の示した因子構成、および、オリジナルのCorriganの因子構成する項目と比較した。その結果、各因子で1～2項目の違いはあるものの、下位概念の構造は近似していた。各因子のまとまりを下位尺度として、千葉ら（2011）がピア・サポート活動経験の有無とRASの得点を比較した平均値と当該データを同じ項目構成で比較した（表）。RAS24項目スコアは、本研究では85.6点と3.4点低く、下位尺度では「目標/成功志向・希望」が1.8点低く、他は0.5点以下の差でほぼ同程度であった。藤本ら（2013）のRAS日本語版の調査の対象者はデイケア利用者が約8割を占め、RASは82.0（SD14.2）で、3.6点差で本結果が上回った。

表 RAS日本版(2010)の構成による本調査データとの因子ごとの記述統計量の比較

| 日本版(2010)の因子構成に再編した因子ごとの平均値 (N=107) | 千葉論文(2011)ピアサポート経験あり群 (N=37) | | | |
|-------------------------------------|------------------------------|-----|------|------|
| | 最小値 | 最大値 | 平均値 | SD |
| 目標/成功志向・希望(9項目) | 9 | 45 | 32.4 | 7.9 |
| 他者への信頼(4項目) | 4 | 20 | 14.9 | 3.5 |
| 手助けを求めることをいとわないこと(4項目) | 4 | 20 | 14.6 | 2.8 |
| 個人的な自信(5項目) | 5 | 25 | 16.7 | 4.2 |
| 症状に支配されないこと(2項目) | 2 | 10 | 7.0 | 2.2 |
| RAS 24項目 全体の平均値 | 24 | 120 | 85.6 | 17.4 |

千葉論文(2011)ピアサポート経験あり群 (N=37)の記述統計量
 注) 千葉論文(2011); 千葉理恵、宮本有紀、川上恵人: 地域で生活する精神疾患をもつ人の、ピアサポート経験の有無によるリカバリー-の比較. 精神科看護. 38(2), 48-54, 2011.

RAS との関連要因は、統計的に有意差がみられたのは、ピア・ヘルパー、ガイドヘルパー経験がある人であった ($r = .224$ $P = .046$)。有意確率は.059であったが、「受講の学び・意味づけ」の下位尺度の「仲間・相談者の獲得」であった ($r = .221$)。『受講の学び・意味づけ』について、全体を合成変数として分析した場合は、 $r = .362$ 、 $P = .001$ 、と強い関連を示し、ピア・ヘルパー、ガイドヘルパー経験がある人との関連も認められた ($r = .224$ $P = .046$)。これらより学びのプロセスを分かち合い、仲間意識を醸成できるような学び方の工夫、そしてピア・サポートに貢献できる雇用先開拓や雇

用継続を支援する環境づくりがリカバリーを促し、エンパワメントに寄与すると考える。

就労状況: 資格取得後に「介護・福祉現場」の就労経験がある人は60人(N=106:68.8%)、「一般(介護福祉以外)」の就労経験者は34.0%であった。しかし、調査時点の就労状況は、「介護・福祉現場」で30.1%、「一般」では18.0%と、介護・福祉現場の就労者数の減少が多かった。最も長い就労期間の平均月数が、55.5カ月±29.7(最小:1、最大:225)であった。資格取得後の求職活動はハローワークの障害者窓口(50.4%)が最も利用されていた。また、就職活動での困りごとがある人が78%だった。該当者が多かったのは、「自分の希望する条件を満たすところを見つけること」(32.7%)であった。「就労継続の工夫の実践」は、睡眠、休養をとる、生活リズムをくずさない、服薬を飲み忘れない、について75%から85%が実施していた。就労の困難感「仕事に体力がついていかないこと」が(該当者48.4%)であった。因子分析の結果、第1因子「職場の人的環境面の困難」4項目(クロンバックの係数=.800)、第2因子「体力・体調管理の困難」4項目($r = .754$)、第3因子「待遇面の困難」3項目($r = .888$)で構成された。また、全体11項目の一次元性を確認し、「就労の困難感」とした($r = .867$)。1項目あたりの平均値が高かったのは、第1因子「体力・体調管理の困難」で $3.03 \pm SD.966$ であった。資格取得後の最長就労継続月数と、「工夫実践スコア」が正の関連を示した。初回の養成講習の就労達成率に比較して低いもの(殿村 2003)、一定割合は就労移行し、ハローワーク障害者窓口など、就労支援機関を積極的に利用できていることが、奏効しているものと考えられる。一方、就労継続期間との関連から、体調面の自己管理の重要性が示唆され、体力面が就労継続の課題になっていた。健康管理や体力面に見合った働き方が就労支援において重要であることが示唆された。以上から資格取得後のフォローアップや、就労準備プログラムや相談体制の構築が求められる。

(2) 面接調査協力者の背景について、女性が13名、男性11名、年代は40代が10名、50代が6名、40歳未満が6名、60歳以上が2名だった。疾患は、統合失調症が9名、気分感情障害が8名、発達障害が4名、他、であった。就労状況は、介護福祉職が11名と最も多かった。

以下(数値)は、コード数を示す。受講動機について、「入り口につながる」(3)、「後ろ盾をもつ」(16)というモデルとなるような友人やヘルパー実践者の存在などの出会いがあった。「後ろ盾をもつ」、相談する人(家族、支援者)、先を歩く先輩の存在を知ること、など、自分とのつながりがあることを確認し、孤独で挑むような未知の世界ではないと認識していた。そして「支援からのプッシュ」(12)は、「後ろ盾をもつ」の後ろ盾の人らが、プッシュ機能をつけている。支援者から受講を勧められたという事実が、受講できる力があると支援者から認められた、という自己評価の向上につながっているのではないかと考える。入院中にであった看護助手やヘルパー業務の人の存在に助けられた経験や、ピアカウンセリングやピア・サポートの存在を知り、「自己の経験をつなげる」(12)ことになっていた。病い経験や人との出会いを含めた自己の経験を、資格取得という形につなげようとしていたことが示された。「自分の役割・スキルを高める」(22)は、家族介護に役立つ、ヘルパー資格のもつ魅力とそれによる就労機会などの選択肢拡大への期待、自らの適性を活かしたいなどの動機が含まれる。「自分を変える・挑戦の試金石として」(7)は自身の変化を試してみたい、という挑戦欲求やその覚悟が含まれる。それぞれの挫折経験を乗り越える試金石として受講に自分自身をかけていた。

学びの場として得たことは、8つのカテゴリーとなった(表2)。ホームヘルパー業務などの資格に関する学びではなく、自分自身の特性や、障害や生きづらさをもって生活をするうえで、自己がかかえる障害と社会との関係、個人的な課題と社会の課題とを見る視点などが獲得されていた。学校のような場、リハビリになった、というカテゴリーに関連して学友として仲間と出会い、そこで自身の学びを充実させていながら、自らを省みていた。これを契機に将来の見通しが見えてきた、というカテゴリーもあり、自分自身を理解し、そして生きる力、仲間など生きていくための資源を獲得し、将来への目標や希望など人生航路の見通

表2 講座で学んだことや、得たこと(コード数)

| カテゴリー |
|-------------------------|
| 人間関係、社会性の学び、傾聴(4) |
| 自らの変革の機会や環境を得た 人生の転機(4) |
| 学校のような場だからリハビリができた(4) |
| 実習や体験から気づく学び(2) |
| 自分自身についての気づき(2) |
| 生きる力 アイテムの獲得(2) |
| 目標や見通しを得た(3) |
| 仲間との出会い(5) |

しをもったことは、リカバリーやエンパワメント概念の要素を含む学びを得ていたと考えられる。

面接調査の結果から、語り手の背景には、「挫折経験」という発病や人間関係や仕事など様々な苦難の経験が存在する。そこから、ヘルパー養成講習受講につながるまでに様々な経緯があった。「受講の動機」がどのようなものかによって、その後の成果にも関連してくると考える。そして実際の養成講習は「学校という場」の環境的な側面と機能を持っていると考察される。学び、気づき、励ましあい、認めてもらい、学ぶプロセスでの我慢や忍耐力をつけ、通学や実習で様々な場に出かけることで生活習慣や生活リズムなど社会生活の様々な力をつけていくことができる。そして、資格を獲得という目に見える成果も得られる場になっていた。環境としては、仲間の存在、病気のことを安心して語ることができ、傾聴してくれる支援者や仲間という要素が重要である。ただ、存在するのではなく、その交流が活発にできるような学びのプログラムの工夫、休憩時間にコミュニケーションが活発になるような環境設定なども大切だと考える。挫折経験のある人にとって、講座や就労を通じて目標や希望、見通しが立つ、ということがもたらされるその意味は大きいと思われる。

(3) 本調査の研究協力者(被調査者)で賛同の得られた23人が協力者として研究成果に関連した討議を行うプロジェクトに参画した。グループミーティングを平成29年度から年間3回ほど開催し、様々なテーマ(生活での対処法、ストレスとの付き合いかた、職場での悩みなど)の話題を語りあった。そして、研究成果発表シンポジウムを企画した。「REBORN」というテーマを当事者である研究協力メンバーで決定した。精神疾患の発病、障害によって就労や進学の道が閉ざされた時に、周りから否定的な評価を受け続け、自尊心を傷つけられてきた経験を持つ人が多い。「私たちは一度死んだ。そこからヘルパー養成講座を起点に再び生き返った」という当事者メンバーの言葉からリカバリーではなく、REBORNというテーマ選択に至った。REBORNとリカバリーの概念は、再び新たな人生を歩むという点は共通している。

これまでの量的調査、面接調査からみえてきたことを総括すると、新たな人生に向かうことができたその契機に力点を置いている概念がRebornではないかと考える。エンパワメントやリカバリーのプロセスに、Rebornの「契機」となるもの(今回は本プログラム)をどれだけ社会が提供できるのか、学び、リカバリー・カレッジなど、学びの環境が今後改めて注目されると考える。

(文献)

- Anthony, W.A.(1993).Recovery from mental illness: the guiding vision of the mental health service system in the 1990's. Psychosocial Rehabilitation J, 16(4),11-23.
- 相川章子 (2011)北米におけるピアスペシャリストの動向と課題 ソーシャルワーク研究 37(3), 191-202.
- 相川章子(2012) プロシューマ の歴史と動向. 精神療法, 38(2)、253-264 .
- Chiba, R., Miyamoto,Y., Kawakami, N. (2010). Reliability and Validity of the Japanese version of the Recovery Assessment Scale (RAS) for people with chronic mental illness: Scale development. Int J Nurs Std, 47(3),314-322.
- 千葉理恵、宮本有紀、川上憲人(2011)地域で生活する精神疾患をもつ人の、ピアサポート経験の有無によるリカバリーの比較. 精神科看護. 38(2), 48-54.
- Corrigan, P.W (2004) Schizophrenia Bulletin, Vol. 30, No. 4, 1035-1041.
- 藤本裕二、藤野裕子、楠葉洋子(2013).地域で暮らす精神障害者のリカバリーに影響を及ぼす要因.日本社会精神医学雑誌, 22, 20-31.
- Gerry, L. Berry, C. Hayward, M.(2011). Evaluation of a training scheme for peer support workers. Mental Health Practice, 14(5), 24-29.
- 石神文子、殿村壽敏、清水由香、他(2009).精神障がい者の2級ヘルパー資格習得後の就業の実態と雇用の促進のあり方について.財団法人 大同生命厚生事業団第15回 地域保健福祉研究助成平成20年度 報告集 .
- Mowbray, C.T., Moxley, D.P., Thrasher, S. et al. (1996). Consumers as community support providers : issues created by role innovation. Community Ment Health J, 32(1), 47-67.
- 坂本智代恵(2008). 精神障害者のピアサポートにおける実践課題-当事者とパートナーシップを構築するために. 大正大学研究紀要 人間学部・文学部 (93), 190-172.
- 鄭敏基(2012) 精神障害者ピアヘルパー養成プログラムの満足度と効果 : 修了生によるプログラムに対する振り返りを通して, 日本社会福祉学会関東部会論文集 (11), 1-14, .
- 殿村寿敏、行實志都子、野田哲朗(2003).精神障害者ピア・ヘルパー等養成事業における現状と課題. 精リ八誌, 7(11),76-80.
- 行實志都子(2006) 精神障害者ピアヘルパーと利用者の満足度比較. 精リ八誌, 10(1) 42-46 .
- 山口弘幸(2006). 精神障害者ピアヘルパーの就労移行促進に向けた一考察 講座修了後のフォローアップのあり方を中心に. 地域総研紀要, 4(1) 63-70.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 清水由香・栄セツコ |
| 2. 発表標題 地域における「学びの場」としての障害者職業訓練機会の意味をさぐる 精神障害者対象のホームヘルパー等養成講座修了者へのインタビュー調査から |
| 3. 学会等名 第34回日本地域福祉学会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 清水由香、栄セツコ |
| 2. 発表標題 地域における「学びの場」として障害者職業訓練機会の意味をさぐる - 精神障害者対象のホームヘルパー等養成講座修了者へのインタビュー調査から - |
| 3. 学会等名 第34回日本地域福祉学会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 清水 由香 |
| 2. 発表標題 ホームヘルパー資格を取得した精神障害者の就労経験による肯定的な生活変化の自己評価 |
| 3. 学会等名 日本介護福祉学会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 清水由香・栄セツコ |
| 2. 発表標題 精神障害者対象のホームヘルパー等養成講座修了者による受講の意味づけに関する研究 質問紙調査の分析から - |
| 3. 学会等名 第31回日本地域福祉学会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 清水由香・栄セツコ |
| 2. 発表標題 ホームヘルパー等資格取得をした精神障害者の就労状況と支援ニーズに関する研究-精神障害者対象のホームヘルパー等養成講座9期間の修了者対象の質問紙調査から - |
| 3. 学会等名 第65回日本社会福祉学会秋季大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究成果報告を含めたシンポジウム 「精神障害者ホームヘルパー養成講座修了者の就労と生活に関する研究報告&シンポジウム ReBORN!」を開催
2019年5月19日 10時~16時30分 大阪市立大学 学術総合情報センター文化交流室等にて。参加者は精神障害当事者、障害者就労支援関係者、地域精神保健福祉職など総勢80名が参加した。

| 6. 研究組織 | | | |
|---------|--|-----------------------------------|----|
| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
| 研究協力者 | 石神 文子 (ISHIGAMI Fumiko) | 石神記念医学研究所・代表 | |
| 連携研究者 | 栄 セツコ (SAKAE Setsuko) (40319596) | 桃山学院大学・社会学部・教授 (34426) | |